



内なる国際化



今回は研究科の「内なる国際化」と題して、関係の深い4名の教員に集まいただきました。柏キャンパスにおけるこれまでの取り組みを振り返りつつ、新領域を真に国際学術研究拠点として発展させるための課題や今後の方向性についてお話を伺います。

堀田 今日は、お集まりいただき、ありがとうございます。まずは柏キャンパスあるいは新領域創成科学研究科（以下、新領域）としての国際化の経緯をお話いただけますか。

大島 柏キャンパスは設立の理念の一つに「国際化」を掲げていました。留学生や外国人研究者への支援を部局別で行うことにより生じていた問題を解消するため、キャンパス共通の窓口を設立したのが柏インターナショナルオフィス推進室（以下、柏IO）です。

柏IOの設立と同じ時期に、新領域の国際交流室（以下、ILO）も機能が強化されました。それまでは、語学や生活面の支援が中心でしたが、研究や教育面でのサポート、協定についての実務などの新しい役割を担うことになりました。

松岡 当時、「国際化拠点整備事業（グローバル30）」という文部科学省の外国人留学生の受け入れを推進する事業があり、東大も採択されていました。柏IOは、その事業によってつくられました。柏支部でもありました。「内なる国際化」はその当時のキーワードです。

堀田 柏キャンパスには学部はなく、大学院と研究所だけで先端的な研究を行っています。国際的な研究や探求を通じて、海外と国内の区別を意識しないで研究に打ち込める環境を目指すことから「内なる国際化」というキーワードが出てきたのでしょうか。外部からも賛同の声が上がっている柏キャンパスの国際化は、私達に課せられた大きな使命だと考えています。

キムさんは、留学生として博士課程を修了され、現在は柏キャンパスで助教として

勤務されているわけですが、「内なる国際化」は進んでいると思われませんか。

キム 学生のころから、柏IOとILOはよく利用していました。留学生としては1対1のチューター制度にとても助けられました。日本人の学生が1対1で留学生一人では難しい手続きなどをサポートしてくれてとても助かりました。ただそれが留学生全員に当てはまるかというと、チューターとの交流がほとんどなかったという声も聞きました。

その一方で、同じ国からの留学生同士による交流の方が有益だったという例も聞いています。中国人のLINEグループや先輩の留学生からのサポートなど、日本人からの支援はなくとも上手くいっている例もあります。

松岡 支援の形態として、組織から個人へ

の支援と、個人から個人への支援の、2つがあります。前者は研究科として制度に則って行うので比較的スムーズです。後者は個人対個人なので、運営を制度化してはいますが、個人の資質やお互いの相性も関わるので、難しい部分もあります。

自分がマイノリティであったことによる困難を経験した学生は、支援する側になった際、留学生が何に困るかを細かく把握出来ている事が多いです。授業や研究だけではなく生活面での支援も必要なので、プライベートな領域への支援はどこまで踏み込むべきかは大きな課題です。

大島 日本人学生の気質が少しずつ変わってきていて、友達とさまざまな局面で積極的にコミュニティをつくって活動することが少なくなっているような気がします。そういった意味では、他人の世話をすることに、あまり積極的ではない風潮があるかもしれません。また、留学生の人数自体が増えてきています。留学生もさまざまなので、画一的に対応するだけでは、上手くいかないこともあるだろうと思います。

堀田 柏キャンパスには基本的には大学院生しかいないので、他のキャンパスとは環

境が大きく違います。課題の一つとして、留学生に留まらず日本人学生でも人間関係が研究室の中だけに限定されて、それを越えたつながりを築きにくいことが挙げられると思います。

またその一方で、留学生の増加により新たな課題が生じています。これから日本で就職する留学生が増えると、日本語の習得へのサポートがどこまでできるかといったことです。

松岡 例えば、柏キャンパスで行っている留学生対象の国内ツアーには日本人学生からも一緒に参加したいという希望が出ています。それ以外にも、日本語教室など、既存の交流の場をより活用するシステム作りも重要だと感じます。

大島 私がアメリカに留学した時に面倒をみてくれたのが、韓国の方でした。アメリカに留学したから、アメリカ人が面倒を見てくれるとは限らないので、日本人と留学生という構図にこだわらない方が良くも 아닐かもしれません。

堀田 大学としては、日本人学生も留学生も同じように受け入れているわけですから、そこでのコミュニティの作り方については柔軟に考えるべきだと思います。学生の交流に関してはいろいろな施策がありますね。

松岡 海外の大学から来る交換留学生が増え続けています。日本から留学する場合、

修士課程の在籍期間は2年しかないのですが、その間に半年あるいは1年留学する場合はより前に目的意識をもって、計画する必要があります。

大島 海外に行くこと自体はいろいろな意味での経験として貴重だと感じています。学生がいろいろな国の先端的なものに触れて自分の研究に関する視野を広げることは、とても意義があるので、研究科としても推進するべきではないでしょうか。



一方で、少子化の影響もあり、入学者全体の数は増えていません。教員側からすると、せっかく研究室に来た修士の学生が、留学でいなくなってしまうのは、困るところもあるかと思います。留学は学生本人のためには良いことですが、研究室の運営からは、諸手を挙げて行ってこいと言える教員は多くないのかもしれない。

学生が留学することが研究科の文化として定着すれば、留学に対するハードルは下がるでしょうから、これは長い目で見る必



新領域創成科学研究科
国際交流室 (ILO)
<https://www.ilo.k.u-tokyo.ac.jp/>



- 新領域創成科学研究科へ入学をしたいと考えている留学生への入試に関する情報提供
- 在籍中の留学生や外国人研究者への在留資格・査証および奨学金などの情報提供、日本語教室の開催、日本文化紹介ツアーなどの企画・実施
- 国際学術交流協定締結に関する手続き
- 交換留学を希望する学生への情報提供及び手続き
- 新領域創成科学研究科への公式な訪問をする場合の学内調整

要があると思います。

堀田 国際化には学生の語学力向上が大きな課題だと思います。新領域は、国際コミュニケーションや語学についての教育プログラムを提供していますが、学生は活用しているのでしょうか。

キム 「科学・技術英語」という英語で論文を書くプログラムがありますね。研究の国際化のためには英語でのプログラムが非常に重要だと思います。学生たちは自分の研究で忙しくて、語学プログラムを選択しない場合もあるので、学生への啓蒙も課題だと思います。

松岡 海外とのやりとりには「好き」「嫌い」「できる」「できない」にかかわらず英語は必須です。柏キャンパスには英語の「オフィスアワー」制度があり、英語の公的文書なども丁寧なみえていただける環境があり、大変助かっています。

大島 柏キャンパスでは、キャンパス全体を国際化するという考えのもとに、学生だけではなく構成員全員に対して語学教育を提供しています。

海外に出ていく、出ていかないとは別に、一般的には論文や学会発表は英語なので、研究能力を高めるためにも英語能力をもっと上げることが研究科が積極的に進めるべきです。

「新領域はいろいろなことをやります」と世界に対する国際的な発信を、もう少し系統立てて出来たらいいなと思っています。



松岡 万里 助教
国際交流室

一般的には論文や学会発表は英語なので、研究能力を高めるためにも英語能力をもっと上げることを研究科が積極的に進めるべきです。

研究力の向上という意味では、自分の研究を説明するときにテクニカルタームを上手に伝えるかが鍵だと思うんですね。学生が自分の研究の中身がよくわかってない段階では、自分の研究を上手に説明するのは難しい。英語力の問題ではなくて、自分の研究を良く理解する事がまず必要です。

堀田 国際化が自己目的化されるべきものではなく、研究力の強化そのものが国際化を推進することになります。



海外から新領域に留学しようと考えている人たちから見て、新領域が魅力的な場所に映るのかも重要な視点です。講義の内容や研究が実施される環境について、世界で最先端の内容だと認識されることが大切です。

もう一方でよく指摘されるのが、入学試験のシステムの問題です。入学試験を受けるには、紙の願書に記入して郵送する必要がありますが、外国の一流大学と比べると旧態依然です。

キム 東大の入試の手続きは、紙ベースが多いので、日本に留学したいと思っている学生には、ハードルが高いと思いますね。面接も日本に来る必要があります。一方、アメリカの大学院では博士課程の面接もSkypeなどで行うのが一般的です。そういうデジタル化を進めても良いと個人的には思います。

堀田 他方、海外の大学の学部生を主な対象として新領域が実施している「夏季インターンシッププログラム(UTSIP)」は電子媒体で応募が可能ですね。それにより外国



大島 義人 教授
環境システム学専攻

から多くの応募をいただいていますね。

松岡 UTSIPでも最初はEメールで申請書を受け付けていました。次年度から申請数が増えたので、3年目からオンライン申請制度を始めています。申請数は大幅に増えましたし、内部手続きも簡素になりました。

UTSIP参加生には新領域への進学を希望する人もいます。出願方法は日本滞在中に説明しますが、帰国後に実際に出願しようとするとやはりハードルが高いと感じるようです。受験のため来日をしなくてはなりませんし、紙の書類のやり取りが多いですから。新領域に短期滞在した交換留学生在が正規課程の進学を希望することもあります。同様に、新領域で勉強したいと思う、より多くの学生から申請を受けるために、出願時の手続きを少しでも簡素化できるなら、その作業は必要ではないかと思っています。

大島 UTSIPの修了者から東大への留學生が出ていることを考えると、非常にうまくいっているケースだろうと感じます。新領域で実施している研究の中身が素晴らしければ、良い学生が来てくれて、その良い学生により研究の中身が更に良くなるという相乗効果があります。UTSIPは応募倍率が非常に高いので、優秀な海外の学生さんにインターンとして新領域に来てもらうという仕組みを維持して、UTSIPを研究科の一つの看板として継続することが重要ですね。

松岡 「新領域は、こんなにいろいろなことをやります」と、世界に対する国際的な発信を、もう少し系統立てて出来たらいい



Martial Hardy
物質系 博士課程1年

現代の電子機器が必要とする金属の生産と精製は、多くの二酸化炭素を排出します。エコフレンドリーとは程遠いのです。私の研究の目標は、金属を有機化合物に置き換え、より安価で環境に優しいものにする事です。完全な有機コンピューターが実現する日が待ち遠しい!



Masudur Rahman
環境システム学専攻 博士課程3年

私はバングラデシュの海岸域にあるデルタ地帯における、深層地下水の塩分濃度と地下水位について研究しています。デルタが形成される過程でどのように深層地下水が海水からの塩分を含むようになったのか、深層地下水の地下水位が変動するのは何故か、を解明したいと思っています。



Frith Martin
メディカル情報生命専攻 教授

私が行っている研究は、遺伝子の塩基配列を解析することにより、生物学や医学の進歩に貢献し得る知識を得ることが目的です。また、多様な国から来ている留學生に対して、快適に学ぶことが出来る環境を提供するように務めています。

Q&A

Voices

“今やろうとしていること、または今やっていること”



Regina Mardatillah
社会文化環境学専攻 修士課程1年

私はこれまで色々と旅するうちに、自国インドネシアの環境問題の一つである廃水に着目しました。そして日本に来て、微生物を使って汚染物質を除去する浄水処理を研究しています。学び得るこの研究には大きな可能性を感じます。学び得たスキルと知識を、将来、自国をはじめ各国の水環境問題解決への取り組みに応用できることを願っています。日本語を学び、日本を探求することも私には絶好の機会と経験になるはず。



TOPIC 02

夏季インターンシッププログラム

「UTSIP」

<https://www.ilo.k.u-tokyo.ac.jp/summer>

UTSIP Kashiwa では、

- 自然科学や社会科学の分野の最先端研究を体験できます。
- 世界をリードする研究者の講義が聴講できます。
- 6週間のサマープログラムで、海外の学部生が対象です。
- 奨学金と宿舎を支給します。

参加者は、新領域の教授陣や配属先の研究室の先輩から直接、1対1でアドバイスを受けながら、自分で決めた研究テーマに基づき研究活動体験をします。その他、皆で一緒に日本文化体験ツアーに参加でき、また、フィールドトリップを通じて日本の最先端技術を体験する機会もあり、今の「日本」を感じていただくプログラムになっています。



いなと思っています。現在では研究科のホームページも刷新され綺麗になっていますが、現状では本当に必要なことだけしか発信できていません。「新領域に留学したら、このような生活なのか」と感じてもらえるように発信の方法を工夫すると共に、修了した後の様子を伝えることも大事です。実際に日本で活躍している元留学生を紹介することも役立つかなと思います。

発信すべき材料を増やし、広報室と連携して対外的に幅広く発信していくことを実践したいと考えています。

大島 留学生の数、外国人研究者の数が増えていることに伴い、多様性というか、柏キャンパスあるいは新領域の中で、海外の方といろいろな形で接触する機会が増えていることを実感しています。また、それは数字にも現れています。

柏キャンパスあるいは新領域で、国際化がある程度上手に進められた理由には、新しい場所であったことが挙げられるでしょう。柏の街も含めて、新しく作ろうという動きの中に「国際化」というキーワードが含まれていたのが、重要なポイントであったと思うんですよ。

先日、柏の葉に、ニュージーランドのラ

国際化が自己目的化されるべきものではなく、研究力の強化そのものが国際化を推進することになります。



堀田 昌英 教授
国際協力学専攻

同窓会やホームカミングなどのイベントへの参加を呼びかければ、世界各地の修了生コミュニティも充実すると思います。

グビーチームであるオールブラックスが事前キャンプに来ましたね。ラグビーのワールドカップで日本人が海外の人たちと真心を込めて接して、「日本って本当にいい国だった」と感じてもらえたとか、「日本はこういう国だ」ということを海外の人たちに正しく伝えることが出来たことは、市民による立派な国際化です。

国際化で重要なのは、数字で示される「交流の量」ではなく「中身」です。日本のアイデンティティは何なのか、何が新領域のアイデンティティなのか、を伝えることが、一番大事だと思うのですよ。英語による講義の割合を増やすとか、留学生の数を増やすという数字的なものも大切ですが、更に大事なことは、中身の良さが伝わることです。なぜ日本に留学して勉強することに大きな価値があるのかについて、新領域の中で共通の認識が形成され、上手に対外的に発信されれば、更にその魅力が伝わるんじゃないかなと。

UTSIP では日本の文化を知るというエクスカッションをしたり、日本の人々との交流の機会を増やしたりすることも含めて、留学生に「日本に来て良かった」、「新領域を選んで良かった」と、感じてもらえることを目指しています。英語での情報発信や交流が充実されたら、次のステップとしては、日本の良さ、新領域の良さの真髄を海外の人たちに感じてもらう為の努力が必要かなと思っています。

堀田 結局は、人と人とのつながりが最も重要であり価値が高いということですね。海外からの留学生や研究生の方々が、大学院あるいは研究生生活を通して、意味のある時間を過ごせたと感じてもらうことが、教育研究機関としての最大の役割なのかなと思います。

キム 新領域を修了した留学生は増えていますが、修了後のコミュニティが、あ



キム ユリ 助教
国際協力学専攻

まり活発ではないという気がします。

修了する前は、みんな個人の研究に集中して、お互いに交流するための活動をしないうこともその原因だと思います。留学生生活のはじめには、オリエンテーションとか、留学生のための日本文化活動とか、ワークショップとか、いろいろな機会でお互いに仲良くなりますが、時間が経つにつれて、相互のコミュニケーションが希薄になるような気がします。

修了後は、お互いに連絡をとらないために疎遠になる場合も多いと思います。同窓会やホームカミングなどのイベントへの参加を大学から修了生に呼びかければ、それを契機として修了生同士が集まる機会も増えるでしょうし、修了生のコミュニティも充実すると思います。

大島 海外から留学生や研究者が柏キャンパスや新領域に来て、在学中も修了後も、多様性の中で相互の交流が実現できるということが、本当の国際化でしょう。

堀田 それはとても重要な点だと思います。新領域はまだ歴史が浅いので、他の研究科に比べると修了生の数自体が少ないでしょうし、修了した留学生の数も少ないかもしれません。しかし、近い将来においてさまざまな国や地域で、修了生によるネットワークができれば良いと思います。

本日は貴重なご意見をありがとうございました。



影山 陽紀
国際協力学専攻 修士課程2年

国際協力学に必要なグローバルな視点を身につける為、また研究に必要な手法を取得する為、デンマークのコペンハーゲン大学へ留学しております。デンマークは環境先進国として知られ、日々いろいろな気づきがあります。未来の日本へ向けた、新しい観点を持ち帰る事を目指しています。



広瀬 思帆
メディカル情報生命学専攻 博士課程1年

留学先;ハーバードメディカルスクール (Massachusetts General Hospital)
私はライフサイエンスのメッカといわれるボストンへの留学により、人生のテーマを見つけることができた。今後私は博士号を取得後、ボストンに戻り、ベンチャーキャピタリストとして多くの基礎研究成果を新薬につなげることで医療の発展に貢献する。留学で得た経験を還元すべく、今後も海外に飛び出す意義を伝えていきたい。



Paul Consalvi
特任教授

私は「クリティカルシンキング」の正しい定義を日本で広めたいと考えています。「クリティカルシンキング」はよく「批判的思考」と訳されますが、本来は、建設的な考えであり、むしろ楽しいことなのです。それは、私たちの考え、問い、そして異文化間コミュニケーションを改善してくれるでしょう。これからも社会科学的な議論を英語で行う場をより多く提供したいと思います。

Voices Q&A

“今やろうとしていること、または今やっていること”



東京大学 留学生支援ウェブサイト

<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/inbound/ja/index.html>

ピックアップ: 英語相談オフィスアワー(柏)

新領域創成科学研究科 ポール コンサルヴィ特任教授が東京大学柏キャンパスに所属する学生及び職員を対象に研究活動や業務から発生する英語に関する相談をお受けします(完全予約制)。

詳細は以下にてご確認ください。
東京大学留学生支援ウェブサイト>柏キャンパスの方>語学教育プログラム>英語相談オフィスアワー

